

中世初頭における「いとど」と「いよいよ」の

対照的用法について

原 栄 一

これまでの和漢混淆文に関する国語学的研究の大方は、いわゆる和文語と漢文訓読語、あるいは和文体と漢文訓読文体との混淆の度合いを、ただ指摘するに停まっていたかのように見受けられる。したがって、この研究領域を多少でも拡大し、一步でもこの埒外に出ることがわれわれにとって緊要なこととなるが、これは具体的にどのようなことであろうか。

思うに、和漢混淆文が、和漢混淆文体とならざるをえなかった事情について、あるいは和漢混淆文体としなければならなかった理由、すなわちその必然性について、いま一步これへの考究を深めねばならないということになろう。

覚一本平家物語の主要な程度副詞を通覧した折（平家物語副詞覚書その二）語文研究第三七号）、平家物語における和漢混淆の必然性を寡少ながら見出すことができ、その後、金刀比羅本保元物語・平治物語の副詞を検討し、これと対比させた際（和漢混淆文における文学性について）春日和男教授退官記念論文集）に、この必然性が

ますます明白となったのであるが、この和漢混淆の必然性に作品の文学的価値を求めるとするならば、平家物語の文学性の一斑はここにあるわけで、これを看過することはできないこととなるのである。本稿は、保元・平治・平家の三軍記物語とほぼ同時代の、一二〇〇年代前半を中心とした作品の若干について、「いとど」と「いよいよ」の使用法を検討し、その必然性と偶然性とを探ろうとするものである。

平家物語では、純粹に和文だけにしか用いられない和文語「いとど」と、訓読語としても用いられる訓読語的「いよいよ」とが対照的であり、「いとど」は消極的・萎縮的な場面に用いられ、「いよいよ」は積極的・発展的な場面に用いられる。いわば前者は内向的累加表示の情態性程度副詞、後者は外向的累加表示の情態性程度副詞である。これに対し、保元物語と平治物語では、「いとど」と「いよいよ」の使い分けに周到な配慮は払われていないようであり、平家物語との間に文学的差異があるとみられるのである。

なお、和文語「いとど」に対して「いよいよ」を漢文訓読語的用語とすることに疑点が残るかもしれない。しかし、漢文訓読語「ま

中世初頭における「いとど」と「いよいよ」の対照的用法について（原栄一）

二

すまず」が平家物語では特定の場合に用いられる一例を除いて一般には使われないこと、宇治拾遺物語・無名草子等にも皆無であることなどから、「いよいよ」に漢文訓読用語としての意識はあったとみなすことができる。

二

まず、十二世紀後半から十三世紀初期の間の成立とされる宇治拾遺物語（以下「宇治」と略称）についてみると、「いとど」一九例と「いよいよ」二〇例とが、それぞれほぼ同数用いられていて興味深い。今昔物語集（以下「今昔」と略称）では「弥ヨ」三四四例が専用——「イトド」二例と「マスマス」一例は特例^{注1}——され、原典の「増」（マスマス）を「弥ヨ」に訳出するなど、巻第一から巻第三一まで一貫して「弥ヨ」を使っている。宇治を今昔と比較したとき、「いとど」と「いよいよ」とを混淆させている点で、一応、宇治に文体としての潤いを認めざるをえないが、しかし、あくまでもそこには用語上の必然性がなければならぬのである。ここで「いとど」の用例について吟味する。

※宇治と同文的関係にある部分が、今昔または古本説話集に見られるものについては、その部分のみを「」中に示す。（）の数字は、宇治・今昔ともに日本古典文学大系本の、古本説話集は岩波文庫本の、頁数と行数とである。

平家の用法に近似したもの、すなわち悲嘆および不安の情をあらわす場面に用いられたものからあげてゆくと、

- ① 顔もなみだにあらはれて、思いりたるさまなるに、人の来たれば、いとどつゝましげに、思たるけはひして、（二九〇12）

② 「これがかく鳴事」と、興じわらひて、いとどなさけなげにむしるものもあり。（二六五八）「鳥此ク泣ヨ」トテ咲テ▲情无氣ニ揃ル者モ有リケリ。（今昔IV五八三）

③ たよりなかりける女の、清水にあながちに参るありけり。年月つもりけれど、露ばかり、そのしるしと覚えたることなく、いとどたよりなく成りまさりて、（三一七八）「貧キ事弥ヨ増テ、（今昔III四八五12）」

④ 年七十余ばかりなる翁の、……いとど腰かどまりたるが、杖にすがりて歩む。（三二九三）「弥ヨ腰屈ヲレバ杖ニ懸リテ歩ビ来ル有リ。（今昔IV九〇五）」

⑤ いかにも言ふべきにあらぬ者ども、……我ゐたるうつほ木のごときがある。⑥は、生贄にさし当てられた女が悲嘆に暮れ、思いつている姿「つづましげに思ひたるけはひ」にかかっており、⑦もまた、三河の国の風祭の生贄に因み、血涙を流して命乞いをする雄子の毛を郎等にむしらせる場面に使われている。仏道心をよく固めるために、こういう希有の事を故意にさせた定基の悲しい心情を通して「いとどなさけなげにむしるもの」と描写されているのであり、さもないとすれば、「興じわらひて、いよいよなさけなげにむしるもの」のように、「いよいよ」が用いられるべきところである。

⑧は寄るべのない貧しい女の「たよりなく成りまさる」に、⑨は七十余歳の翁の「腰かがる」にそれぞれかかっており、⑩は顔に大きな瘤ある翁の鬼に対する恐怖心を「いとど物おぼえず」で表わしている。いずれもこれらの「いとど」は内向的累加を表示しているともみられる。

ここで注目されるのが「あさまし」の上に立つ「いとど」四例である。

- ① こと人の目には、ただ聖ひとりして食ふとのみ見えければ、いとどあさましきことに思けり。(八七10)
- ⑧ したしき人々、近くてよくみんとて、よりてみれば、ひつぎより出でて、又妻戸口にふしたり。「いとどあさましき、わざかな」とて、又昇きいれんとて、万にすれど、さらにくゆるがず。(二四〇2)
- ⑨ この鉢に蔵のりて、……、この聖のおこなふ山の中に飛びゆきて、聖の坊のかたはらに、どうとおちぬ。いとどあさましと思て、(二三九12)「いとどあさましと思ひて、(古本説話集一四三12)」

① この鉢に一俵をいれて飛すれば、鴈などのつぎたるやうに、残りの俵どもつぎたり。むらすめなどのやうに、飛つぎたるを見るに、いとどあさましく貴ければ、(二四〇7)「いとどあさましく、たうとければ、(古本説話集一四四10)」

①の「いとどあさまし」は、餓鬼畜生など数万の鳥獣の白米十石を食べている様子が、他の人の目には清徳聖一人で食べていると見えたとに対する不思議な気持を表わし、⑧は、長門前司の娘の死体が棺から出ておのずから移動し、また妻戸口に横たわっていることに對する不思議な気持を、また⑨も、蔵や米俵が信濃国の聖の飛鉢に乗って飛行するという、法驗の高さを示す奇跡に対する不思議な気持を表わしている。このように、どれも靈驗の不思議な力に対する「あさまし」の気持を強調する場合に「いとど」が用いられており、この「いとど」に恐懼の念が込められているように思われる。

宇治に用いられる「あさまし」九一例を修飾する副詞は、「いとど」四例「いとど」六例「まことに」三例「よに」一例、計一四例であるが、「いよいよ」は全く見あたらないのである。このような場合に外向的「いよいよ」を使用することはなかったことが知られる。これらに準じて、法華經受持者を守護する十人の羅刹女が僧に付き添っているという次の例

① それにいとどこの僧に十羅刹の添ひておはしけると思に、法華經の、めでたく、よみ奉らまほしくおぼえて、俄にかくなりであるなりと、かたり侍りけり。(三〇五4)

も、この不可思議に對し恐れ入る気持から、「いとど」を用いているようにみなされる。

次にあげる三例は、能書家敏行が死後に閻魔王宮へ拘引されたときのことを述べた「敏行朝臣事」(一〇二・卷八ノ四)にあらわれ、それぞれ今昔に「いとど」の相当部が見られる。

- ⑫ 「……この川は、なんちが書き奉りたる經の墨の川なり」といふに、いとどおそろしとおるか也。(二四六13)「此レヲ聞クニモ、弥ヨ怖ルヽ心无限ナシ。(今昔三三六6)」
- ① 軍ども、目をいからかし、舌なめづりをして、我を見つけて、とく率て来かしと思たるけしきにて、立さまよふを見るに、いとど土もふまれます。(二四七8)「此ヲ見ルニ、更ニ物不思エズ。(今昔三三六11)」
- ⑭ 軍ども、悦べる気色にて請とらんとするときに、わななく、「四卷經書き、供養せんと申願のさぶらふを、そのことをなん、いまだ遂げ候はぬに、召されさぶらひぬれば、此罪おもく、いとどあらがふかた候はぬなり」と申せば、(二四

中世初頭における「いとど」と「いよいよ」の対照的用法について（原栄一）

四

八六（「此ク被召ヌレバ、只此ノ罪贖フ方不有ジ。（今昔Ⅲ三一七四）」）

⑧は、敏行が生前の不浄懈怠にして書いた法華経の墨が川に流れていると聞かされ、戦慄する場合での「いとどおそろしとおろか也」であり、今昔の「弥ヨ怖ル、心无限ナシ」と比較すると、萎縮的な「いとど」の方が「弥ヨ」よりもこの場にふさわしいことがわかる。また①も、復讐しようとする軍兵が立ちさまよっているのを見て、恐怖のあまり足が地につかず「いとど土もふまれず」としているものであり、この「いとど」によって恐怖心が十分に表現されているように思われる。今昔では「更に物不思エズ」としているが、今昔の「更ニ」は否定強調の陳述副詞として画一的に用いられるものではない。ここでも宇治と今昔の差を見ることができ、⑩もこれらと同様に、軍兵が手柄を喜んで受け取ろうとする時、抗弁の余地もない敏行がぶるぶる震えながら申したことが「いとどあらがふかた候はぬなり」であり、「いとど」が「わななくわななく……申せば」とよく照応している。今昔の「只此ノ罪贖フ方不有ジ」の「只」では、恐縮した態度などなら表現することはできない。

これまでの諸例から、「いとど」は悲嘆不安の情を表わす場合、もしくは恐懼戦慄する場合に用いているということが知られる。すなわちこれらの「いとど」は消極的萎縮的内向的な陰性の副詞とみることができ、

しかし、ここにも例外がある。「いとど」一九例中の三例が違例である。

⑨ 沖にては、いとど風吹きまさりければ、帆をあげたるやうにて行。（一五七六）「弥ヨ風ニ被吹テ、（今昔Ⅳ四四四三）」

⑩ 赤ひげなる男の、……たちぬ居ぬ、指をさしなど、かたり居れば、人々、さて／＼といひて、問ひきけば、いとど狂ふやうにしてかたりをる。（三三三三）「弥ヨ狂フ様ニシテ語り居リ。（今昔Ⅳ二五一一六）」

⑪ いとはしかりつる事を、思ひかけぬ人のきて、たのもしげにいひていぬるは、いとかくたゞ観音の導びかせ給なめりと思て、いとど手をすりて念じ奉る程に、（二六五十三）「手ヲ摺テ弥ヨ念ジ奉ル程ニ、（今昔Ⅲ四三六九）」

⑫ 「風吹きまさる」⑬ 「狂ふやうにしてかたる」⑭ 「手をすりて念ず」は、いずれも積極的発展的な場面であり、これらには、今昔のように「弥ヨ」が適合するのである。宇治でも

⑮ 人々あわてて、家共つくろひさわけども、風いよ／＼吹増りて、村里の家どもみな吹倒し、野山の竹木倒れ折れぬ。（三七三六）

⑯ 命終るに、いよ／＼心、仏を念じ入て、浄土にすみやかに参りてけり。（三四八一〇）

のように、「風吹き増る」「仏を念じ入る」に「いよいよ」をかけたものが見られる。

このように三例の例外が見出されるとはいえ、宇治における「いとど」の用法を偶然性で片付けることはできないのではないか。内向的「いとど」と外向的「いよいよ」とを対照的に把握してみると、そこにはどうしても必然性が見られる。

⑭ ゆゑしげにし置きたらば、それに見あきて、心もやなぐさむとこそ思ひつれ。こはいかなることぞ。かく心ある人やはある。たゞ人とおおぼえぬありさまども、と、いとど死ねば

かり、思へど、かひなし。「わが見んとしもやは思べきに」と、
かゝる心ばせを見てのちは、いよ／＼ほけ／＼しく思ひけれ
ど、遂にあはでやみにけり。(二五〇・10・11)

のごとく、「いとど」と「いよいよ」とを対比的に用いたところがある。好色家平貞文が、本院侍従という女房にあしらわれ、すっぱかされ、遂に心尽しに思うことを断念し、「この人のわろく、うとましからんことを見て、思ひうとまばや」と思う。しかし奪った便器からは香料の作り物が出てきて裏をかかれ仰天する、という筋であるが、「いとど死ぬばかり思ふ」と「いよいよほけほけしく思ふ」とが対照的で、萎縮的に絶え入るばかりせつなく思う気持と発展的に心が呆けてしまうほど恋しく思う気持とが、生き生きと描出されており、この「いとど」「いよいよ」を無意識に用いたとは思われない。さらにまた、「いとど」「いよいよ」がそれぞれ「心にくし」にかかっている場合の

① とのゐ物とおほしき衣、ふせごにかけて、たき物しめたる
匂ひ、なべてならず。いとど心にくくて、身にしみていみじ
と思ふに、(二四八16)

① そらだき物するやらんと、かうばしき香しけり。いよ／＼
心にく／＼おぼえて、よくのぞきてみれば、年廿七八斗なる女
一人ありけり。(二五五12)

についてみると、①「いとど心にくし」と①「いよいよ心にくし」とは質的に相違することが知られる。①は、平貞文が女に「あはれ」と思われたいばかりに豪雨の夜を選んで訪れた場面で、男の方が劣位の立場にある。したがって内向的「いとど心にくくて」であり、その姿勢が後の「身にしみていみじと思ふ」にあらわれている。一

方①は、滝口道則が郡司の家に宿った夜、香のよい匂いにさまよい行く場面で、ここは積極的「いよいよ心にくくおぼえて」であり、後の「よくのぞきてみれば」にその気持が端的にあらわされている。

以上のように、「いとど」「いよいよ」の三例と後にあげる疑わしい一例⑤を除く一五例が、内向性を帯びたものとして使用されていることは、三例の例外が見られるにもかかわらず、これらを「いよいよ」との区別なしに偶然用いられたものとみなすことはどうしてもできない。ここに「いとど」を使わねばならなかった必然性があったと認めるならば、一様に「弥ヨ」を用いた今昔との宇治との間に文学的径庭を設けねばならないのではないだろうか。

存疑例とは、

⑤ その後より、いとど守殿をば、「ことにすぐれて、いみじき人におはします」と、いよ／＼いはれ給けり。(三一三16)(其後ヨリナム▲此ノ守ヲバ艶ズ極ノ兵也ケリト知テ、皆人弥ヨ恐テ怖レケリ。(今昔IV三八七17))

のように、「いとど」と「いよいよ」が重複して用いられた例である。ともに「いはれ給けり」にかかっているが、「いよいよ」だけで十分なところであり、今昔の「いとど」相当部が欠落していることから、この「いとど」は後に紛れ込んだものということも考えられる。

さて、「いとど」と対立すべき「いよいよ」二〇例は、既出の五例(①②③④⑤)を除き次のときのものである。

- ① いよいよなん笑あざけりける。(三〇七15)
② いよ／＼笛を吹ていけば、(二〇六14)
③ いよ／＼悦をいたゞきて、かくて参りたるなり。(一六一11)

中世初頭における「いとど」と「いよいよ」の対照的用法について（原栄一）

六

③ 貴きおほえはいよ／＼増りけり。（三三九）

④ 別当僧都聞きて、いよ／＼貴とみて、（四二七）

⑤ 心中の道心は、弥堅固に行ひけり。（四二七）

⑥ 犬はいよ／＼不便にせさせ給けるとなん。（四〇六）

⑦ いよ／＼相撲などのやうにてぞおはしける。（二二四）

⑧ いよ／＼寺はこぼれて荒れ侍ける。（三七二）

⑨ まして、若く盛りならん人の、よく道心おこして、随分

せんものの功德、これにていよ／＼おしはかれたり。（三三〇）

⑩

それよりして、人おちて、弥件の金とらむと思ふ人なし。

（九二一）

⑪ それよりいよ／＼逃のきて、又都へ入て、（三七九）

⑫ 女、すこしほゝあみてありければ、いよ／＼心得ず覺て、や

はらおきて、わがねどころへ歸りてさぐるに、さらになし。

（二五六）

⑬ 物もいはれねば、此庁官、いよ／＼おそれかしこまりてう

つぶしたり。（四〇一）

⑭ されば、いよ／＼いみじうおそろしくおほゆる国也とて、

怖ぢけり。（三五二）

これらは、いずれも積極的発展的な場に用いられ、例外はない。⑮

⑯ は一見、例外のように見えるがそうではない。⑯は、殿上人達が

六という気の利いた女を召したところ、六と録との同音から人違い

で刑部録という庁官が参上し、なんとも言葉も出ない殿上人を前に

ますます緊張して平伏している態度に用いたもので、悲しみとか不

安の情は全くない。また⑯は、新羅で虎を退治した日本人の武勇に

感心し、日本の武士道をますます感賞するのに用いたものである。

右のように、宇治の「いとど」と「いよいよ」の用法は、「いとど」の連例三を除いて概ね対照的であり、今昔との相違点ひとつを明示している。

この「いとど」と「いよいよ」との意識的識別が平家物語に限らず宇治にもみられることは、軍記物語とか説話文学とかジャンルの問題ではなく、語史の一齣としてのこの事象を把握しなければならぬことを示唆している。

三

ここで、和漢混淆文から眼を転じると、建久七年（一一九六）から建仁二年（一二〇二）頃のもので俊成卿女（俊成の孫）の作とされる無名草子がある。この評論書には「いとど」八例と「いよいよ」三例とが用いられているが、「いよいよ」三例のすべてと「いとど」二例とが序の冒頭部に続出するのが注目される。

① 八十あまり三とせの春秋いたづらにて過ぎぬることを思へ

ばいとかなしく、……。年月のつもりに添へていよいよ昔は

忘れがたく、ふりにし人は恋しきままに、……。あまた年経

ぬれば、いよいよ頭の雪つもり、おもての浪もたたみて、い

とど見まうくなりゆく鏡の影も、われながらうとましかれば、

人に見えむこともいとどつましけれど、道のままだに花を摘

みつ、……。ほどに、最勝光院の大門あきたり。うれしくて

歩み入るままだに、御堂のかざり、仏の御様などいとめでたく

て、浄土もかくこそと、いよいよそなたにすすむ心もよほ

さる心地して、（校註無名草子・一六 10 10 12・二四）

右のように、八十三歳の老女が尼となり、最勝光院を訪れるところを述べた巻首に集中してあらわれるが、「いとど」と「いよいよ」との区別はいかなるものであろうか。

「いよいよ」がかかる語句についてみると、「昔は忘れがたし」「頭の雪つもる（白髪ガ殖エル）」「そなたにすすむ心ももよほさる（浄土ニ往生シタイ氣ニ驅ラレル）」のような、いずれも発展的・外向的な内容となっており、これに対して「いとど」は、「見まうくなりゆく」「つつまし」のように、萎縮的・内向的な語句を修飾している。

このような「いよいよ」と「いとど」との混用の中にも、両者の弁別がなされていたことを知るのである。「いとど」は右の二例と源氏物語・葵から引用された歌に見られる一例とのほかに、

- ⑤ 姫君の御ときこえたまへるに、いとどつつましげなる顔ひき入れて、おなづきたるほどなどこそいとほしけれ。（四五
13）

- ⑥ いづれもいとどあはれを添へむとなるべし。（四九10）

- ⑦ さてもいとど涙のもよほしなりけり。（八五2）

- ⑧ 「十羅刹の御徳に殿上ゆるされはべりにたり。まして後の世もいとどたのもしや。」などきこえて、（七5）

- ⑨ 何事よりも優なる人多くさぶらひけむこそ、いとど心にくめでたくおぼえはべれ。（九一3）

の五例がある。⑥⑦⑧の「いとど」は、「つつましげなり」「あはれを添ふ」「涙のもよほしなり」のごとき語句にかかることから、序に見られる二例と全く同様である。⑨は、「後の世もいとどたのもしや」のみから判断すると、「たのもしや」の修飾語として「いとど」は不適当であるかのように思われるが、宇治拾遺物語の用例①「いとど

この僧に十羅刹の添ひておはしましける」を参考にすると、十羅刹の御徳の不可思議に対して恐れ入る気持が、この内向性をもつ「いとど」に込められているとみることができ、①の「いとど」は、これを「心にくめでたくおぼゆ」が承けているが、「いとど」が「心にくし」あるいは「めでたし」にかかる例は、中世初頭においては希有である。無名草子で「心にくし」の前に立つ副詞は「いと」七例「いみじく」二例であり、「めでたし」の前には「いと」「一例」「いみじく」六例「かぎりなく」二例「かへすがへす（も）」一〇例などがくるのが一般である。やはりこの①は特例であろう。

特例が見られるとはいえず、評論書たる無名草子でも、平家や宇治と同じように、「いとど」が内向性をもつものとして用いられる傾向は認められる。また「いとど」と「いよいよ」との対照的用法も、これが序の冒頭部という特別の場に見られるがゆえに、注目すべき用例となる。

次には、無名草子の中で、「松浦宮とかやこそひとへに万葉集の風情にて、宇津保など見る心地して……」と述べられている松浦宮物語を、当時の物語の一つとしてみることにする。文治五年（一一八九）から建仁二年（一一〇二）頃のもので、藤原定家の作とされるものである。

「いとど」二八例に対し、「いよいよ」は僅かに二例が用いられているにすぎない。

「いよいよ」の二例

- ⑩ いくさ又おそれすすみがたき時に、いよいよいさめる心を
おこして、一人はなれいづ。（角川文庫本・六一10）

- ⑪ その心ざしをやぶらば、いよいよ恩をわするべし。（八七9）

は、ますます勇猛心を振り起こす、ますます恩を忘れる、という場合であり、どちらも外向的「いよいよ」の用法である。

しかし「いとど」二八例の中には、

- ① いみじきむまをいとうちはやめつつ、（三二一・八）
 ① 月にもよほされては、いとどむれきて、なやましきさかづきをのみすむれば（一一三・二）

のごとき積極的・発展的な動作をはじめ、これに類する「心はみだれて・心はさわぎて・心さわぎして・えたちさらず・したしくのみならさせ給ふ・まぎるるかたなければ・ありし月かげもよほさる」のごとき語句にかかる「いとど」が一〇例も見られる。

松浦宮物語では、「いとど」と「いよいよ」の用例数の不均衡からも推考されるように、「いとど」を「いよいよ」との対照において使い分けるという意識はほとんどなかったように推察される。

定家の「いとど」を用いた短歌一六首についてみても、もちろん悲哀の情を詠んだ数首にも用いてはいるが、直接に「かなし」を修飾する「いとど」は

- ④ あすしらぬ世のはかなさを思ふにもなれぬ日数そいとかなしき（藤原定家全歌集全句索引本文篇・二五三二）
 の一例が見られるにすぎない。これら一六首のうちには、

- ① はるくれはいと光をそふるかな雲井の庭も星のやとりも（二八九・二）

- ② さみたれにけふも暮ぬるあすか川いとふちせやかはりは、つらむ（二二七）

のように、発展的・外向的に用いた「いとど」も見られることから、定家において、「いとど」に対する消極的・萎縮的・内向的意識は、

まずなかったと判断してよいようである。

定家の歌と対照的なのが建礼門院右京大夫の歌である。建礼門院右京大夫集は貞永元年（一二三二）までには成ったとされるものであるが、歌八首と詞書に三例、計一例の「いとど」が見られる。歌八首をあげると、

- ② あきゝてはいとゝいにかしくるらむ色ふかけなる人のこと
 の葉（建礼門院右京大夫集校本及び総索引・一五八）
 ③ たちはなの花こそいとゝかほ（わ）るなれ風ませにふるあめ
 のゆふくれ（二三・四）
 ④ なさけおくことの葉ことに身にしみて涙の露そいとゝこはるゝ（二九・五）
 ⑤ きくからにいとゝむかしのこひしくてにはひのふゑのねに
 そなくなる（三六・八）

- ⑥ おもふことをおもひやるにそおもひくたくおもひにそへて
 いとゝかなしき（六七・一）

- ⑦ かなしきのいとゝもよをすみつくきのあとは中／＼きえ
 ねとそおもふ（七二・一）

- ⑧ あとをたにかたみにみんとおもひしをさてしもいとゝかな
 しさそゝふ（七四・四）

- ⑨ ありし世にあらすなるこのおときけはすきにしことそいとゝ
 かなしき（八〇・一）

のように、⑥を除いて七例までが悲嘆の情をあらわす「しぐる・涙の露こぼる・こひしくてなく・かなし・かなしきのもよをす・かなしさそふ」にかかり、詞書の三例も、

- ⑩ おもかけいとゝすゝむかなしさに（五六・六）

⑦ おもひなしもいと心ほそくかなしき事のみまさりて(五
六八)

⑧ のこりていかに心よはくやいと心ほゆるらん(六五10)
のように、「すすむかなしき・心ほそくかなし・心よはくおほゆ」
にかかっており、「いとど」を萎縮的・内向的・累加表示の副詞として用
いていることは明らかである。

しかし、ここで注意すべきは、「いとど」が伝統的に和歌に多用さ
れたということである。井上博嗣氏は中古の「いとど」について、
「歌語と言えぬ迄も、歌と云うものが当時の人に与えた上品にして
美なるものと言った印象をこの語に感じられたのではなからうか。
そういった表現性をもちえた語を、今仮りに「雅語」と呼ぶなら、
「いとど」は「いと」「いと」と「がもちえなかつた雅語的なものを
多分にもちえたと考えるのである。」と述べていられる。たしかに中
古における「いとど」は雅語的性格をもつものであったに違いない。
特に和歌の世界にあって、「いとど」は重宝な副詞として賀歌にも哀
傷歌にも駆使されているのである。したがって、和歌の世界におい
て「いとど」に内向的・萎縮的な意義が付加されるなどとは毛頭考
えられない。それは「いとど」と「いよいよ」との対照によつては
じめてなされることであり、和漢混淆文を土壤としなければならな
かつたのである。このようにみると、定家の歌に見られる「いとど」
に内向性を求めることは無理であり、松浦宮物語の「いとど」と「い
よいよ」にその対照的機能を求めることもまたできないことである。
と同時に、建礼門院右京大夫集の「いとど」の用法は注意されてよ
いであろう。このように和歌において、平家や宇治の内向的「いと
ど」の用法と同様に意識的に用いられるに至った過程については、

ひとつの課題として残るであろう。

四

これまでの検討から、中世初頭におけるいわゆる和文語「いとど」
と漢文訓読語的性格をもつ「いよいよ」との間には、ひとつの差異
が見出される。それは、「いとど」が内向的・萎縮的・消極的性格を
有するに對し、「いよいよ」は外向的・發展的・積極的性格を有する
という点である。この差異は中古においては見られない。たとえば、
「いとど」の用例三三五をもつ源氏物語で、

④ 参りては、いとど心苦しう心肝も尽くるやうになむ。(対校
源氏物語新釈I一〇10・桐壺)

⑤ 雪の光に、いとど清らに若う見え給ふを、老人どもあみさ
かえて見奉る。(I二五六13・末摘花)

のように、「いとど」を内向的累加にも外向的累加にも用いてその区
別は全くない。和歌においても同様、哀傷歌にも賀歌にも「いとど」
は使われる。「いとど」を多用する和文において、「いとど」に雅語
の性格があつたにせよ、それ以上の、あるものに対する対照的な表
現性などが付加されることはなかなか容易なことではない。「いと
ど」と「いよいよ」とが相互に対照的な表現性を付加しえたのも、
両者が対等に混淆し、しかも拮抗したからにはかならない。よつて、
これらを育む土壤となつた和漢混淆文の存在は大きな意味をもつと
いえよう。松浦宮物語の事例でわかるように、「いとど」「二八例に對
して「いよいよ」は二例のみ、まさしく和文であり、ここには「い
とど」と「いよいよ」とを対照的に用いるという意識はなかつたの
である。

中世初頭における「いとど」と「いよいよ」の対照的用法について（原栄一）

和漢混淆文とはいっても、和文語と漢文訓読語が用語上の配慮なしに無造作に混淆したものであれば、それは文学的に無価値といわざるをえないであろう。宇治拾遺物語にも三つの違例が見られ、全面的にはいえなくとも、大半の「いとど」と「いよいよ」とはその使い分けに必然性が認められるのであり、文学的評価はなされてしかるべきだと思われる。終始一貫「弥ヨ」を専用した今昔物語集との文学的径庭をここに見るのである。

古本説話集では「いとど」五例「いよいよ」六例「いといと」六例「ますます」一例と多彩な用法が見られるが、はたしてこれらの用語に必然性があったのかどうか、今後考究の対象としたいと思う。十訓抄・古今著聞集・沙石集なども魅力ある作品である。

無名草子の序に見られる「いとど」と「いよいよ」の識別は個人的に固定化していたものではなかったか、和歌においても建礼門院右京大夫集のような偏向が見られるのであり、中世初頭における「いとど」にはまだ大きな謎が残されていることを知るのである。

注1 可咲キ音共ヲ以テ詠ズルニ、イトゞ歌□テ微妙ク聞ユル事无限リ。

（今昔Ⅳ三二五七）

キミナクテアシカリケリトオモフニハイトゞナニハノウラゾスミウ

キ（今昔Ⅴ二二六六）

着ル所ノ大刀ヲ解テ神主ニ給ヒテ、増、ス財ヲ与エ給フ。（今昔Ⅰ二八九七）

2 井上博嗣氏「中古の程度副詞について」国語国文37ノ12